



卓 話



「音霊について」

歌手・ギタリスト

アントニオ 古賀氏

今日は音魂という演題で講演を致します。私はお陰様で恩師、古賀政男から「古賀」という名前をいただいて満50年を迎えました。50年前デビューした時、古賀メロディーを自分なりのスタイルにアレンジしたいと思い、それまでギターをやっていたので、フラメンコギターをもじり、「フラメンコスタイル・古賀メロディー」というタイトルのLP版でデビューしました。そしてフラメンコスタイルという名前がついたので、古賀政男にギターの弾き方を直接指導してくれた、ギタリストのアントニオ・シノポリさんというアルゼンチンの方の名前を頂いたのがアントニオという名前の由来です。アントニオはラテン音楽、古賀の方は邦楽ということで2足のわらじを履いて今までやってきました。50年といっても色々ありました。他の事は何もやらずギターと歌だけをやってきました。この様な私の音楽や話を聞いて頂ける場を設けて下さり、本当にありがたいと思っています。



50周年を迎え、この後何をしようかと考えた時、今の日本は政治も含めて何かおかしくなっていると思いました。政治というのは結局、一般の庶民が政治家を選択しているのですから、日本人が少しおかしくなっている事になります。そうした中、今全国の中学校や高校に行って、例えば古賀メロディーを演奏しても、さらにもっと古い歌をやっても聞いた事がなく、逆に彼らにとっては新曲なのです。でも子供はとても素直ですから、こちらがちゃんと音楽を聞かせると彼らは古くさいとは思いません。日本人は過去にこうした良いメロディーを持っていたのだとわかってくれます。私は童謡、唱歌などの音楽を通じて子供たちに質の良い音楽を聞いてもらいたいと思います。私達の世代は母に抱かれ、母の鼓動を聞き、温もりを感じながら「ぼうや良い子だねんねしな・・・」「ゆうやけこやけの赤とんぼ・・・」などを聞いてきました。このように親と子が共通して歌える歌が昔はありました。だから我々の時代は感性や情感が持てたのです。最近の親、子、先生の間を見ますと、どうしてこんな風になってしまったのかと思います。これはやはり人間同士、特に親子、兄弟の家族間のコ

ミュニケーションがなく、共有するものがなくなってしまったためでしょう。音楽でも、老人から若者まで聞くものが世代別になってしまい、一緒に歌える歌、つまり共感できるものがなくなってきています。こうした事から残された自分の人生を使い、ギターとすばらしい日本の曲をひっさげて、自分の体験を踏まえ、音楽で日本が変わるような話をしていきたいと思っています。

私は昨年のデビュー50周年の半年前くらい、2月26日の誕生日に神様からプレゼントを頂きました。胃ガンです。その時、胃の5分の4を切除し、本当にまいりました。北海道から沖縄まで、自分が来るのを楽しみに待っている人達がいるのに自分はそのまま逝ってしまうのかと手術の後に病院で点滴を受けながら考えました。しかし50周年はなんとか一生懸命やらなくてはならないと困っていました。そんなある晩、故人である古賀政男が枕元にやって来て、何をしているのだ。こっちに来ようたって追いつきからな。古賀という名前をあげたのはおまえだけではないか。古賀メロディーを歌っている人が少なくなっている中、弟子を発掘して世の中に出してやる役目だってある、やる事が沢山あるだろうと言われました。そうか、元気にならないと師匠孝行ができないから、頑張らなくてはいけないのだという事で、病気でやつれてしまいましたが、毎日歩き回り、徐々に健康を取り戻し、今では元気にゴルフもできるようになりました。この病気を乗り越えた時、冒頭で弾かせて頂いた「さくらさくら」や「ふるさと」といった、皆さんの感性の一番豊かな時期に血液に流れ込み、自然に口ずさむようになった曲を伝えたいと思ったのです。

「俺の曲がヒットしたのは俺の曲が素晴らしい訳ではなく、素晴らしい詩人や作詞家がいたためだ。そしてその素晴らしい詩をもらうとそれに負けてはならない、その言霊に対して音魂で戦って曲を書くのだ」と言っていたように、古賀政男はとても詩を大事にする人でした。古賀メロディーが世に出て80年経ちますが、今でも色々な人が歌っているのは、やはり音に命や魂や霊があるからではないかと私は感じています。私は病んでいる時に古賀政男から教えてもらった事や、彼とのエピソードを色々と思い出しました。私は60才を過ぎてから結婚し、今5歳の子供がいます。こうした子供達に何かを残すとしたら、私にできることは童謡などの日本の音楽だろうと思いました。ここで1、2曲古賀政男の曲を弾いてみます。もしご存知でしたら一緒に歌って下さい。

私がロータリークラブに入ったのは先輩の近江俊郎氏の紹介でした。私は大田区なのになぜ原宿なのだと聞いたら、NHKで仕事しているから原宿で良い。そんな理由でし

た。とにかく出席しろとも言われました。そんな訳で私は25年間100パーセントの出席率です。どうせ昼ご飯を食べるなら、ロータリーに行った方が良いと思っていたのです。古賀政男には芸人は目立つのだから良い見本になれ。芸人である前に人間たれという教育を徹底的にされました。やはり師が良かったのでしょう、その教えを守っていかねばならないと思っています。

また古賀メロディーの継承者としても一つ、皆さんに正確なメロディーを伝えなくてはならないという事も教えられました。今皆さんに歌って頂いた歌ですが、間違えがあるので是非正しい歌い方をお教えしたいと思います。これからカラオケにいった誰かが間違えて歌っているのを聞いたら、是非教えて下さい。多くの方が間違えて覚えている所があります。大川栄作、森進一でさえも間違えていて注意した事があります。また昔は良い作詞も作曲もあり、それが今でも残っています。では今の曲が何故残らないのでしょうか。それは、テンポがあり色々な楽器を使って作られているけれど詩がない。先にメロディーを作り、後から詩を入れるので、余計な言葉が多くなり、相手に伝わらないのです。昔の人は詩を、言霊を大事にし、作曲者はそれに対し、音魂を大切に曲を作っていました。

私は8歳の時、古賀政男の「荒城の月」を阿部保夫氏がギターで幕間に弾いているのを聞いて、ギターの音ってあんないい音がするのかと思い、「荒城の月」を弾きたい一心で阿部先生の所に入門し、クラシックギターを10年程やりました。何故歌い手になったかというと、中学3年生の時、同じギターをやっている派手に歌を歌う人がでてきて女の子達にもものすごくもて、羨ましく思ったからです。要するに女の子にもてる為には歌手になった方がいいと考えたのですね。でもせっかくクラシックをやってきたので、何か自分のものがないかと思っていた時にトリオ・ロスパンチョフというメキシコのソンプレロを知り、あの人の音楽を見よう見まねで弾いたところ、学生音楽コンクールなどで優勝し、それがきっかけで歌手になる事になりました。でも事の始まりは「荒城の月」を弾きたかった事で、気が付いたらギターを弾いて60年、デビューして50年になりました。

私は月にこだわりがあります。大分前に母を膀胱ガンで亡くしました。その時忙しくてあまり見舞いに行けませんでした。病院に行くとしてもあと少しで欲しいといわれ、後ろ髪をひかれる思いで病院を後にしていました。そこで母と約束をしました。夜病院の窓から月を見て僕に呼びかけて欲しい、僕も話しかけるから月を中継して話をしようという提案をしたのです。だから今でも月の良い夜、母はもういないけれど、話ができるような気がします。「荒城の月」「月の砂漠」と月の曲から何かを感じるの、イコールは母だからです。父は2歳の時に戦死したので、僕には余り存在感がありませんでした。しかし月の右に一番星が光っているのを見た時、講演で母の事ばかり話しているが、父だって母の後ろから黙って見守っているのだと言われたような気がしました。私にとっては母が月であり、父は星なのです。

「音魂」とは何だといわれても科学的に説明はできません。何か分からないが伝わってくる、目頭が熱くなる、涙がこみ上げてくる、身体が温まってくるといった、何か伝わるものが音魂だと思っています。ですからカラオケのコツを聞かれた時は、まず歌を歌おうと思わずに、この歌が好きで好きでしようがないから聞いてくれというように聞かせると、相手に伝わってくると言います。そうでないとただの音や声になって、歌でなくなってしまうのです。そこには我々が知らない周波数とか霊波を持っていて、それが心の琴線に触れるのだと思います。

50周年で「音魂」という本とCDを出しました。私はキューバという国が大好きです。音楽と平和があればいいという国民性が自分にぴったりで、惚れ込んでいます。日本で余っているピアノを寄付して頂き、4年近くかけて計100台キューバの子供達にプレゼントした関係で、文化功労賞を頂きました。その後カストロ氏と会った時に、私はギタリストなので今度はギターを100台寄付しようかと約束しました。一昨年日本の勲一等にあたる連帯大勲章を頂きました。それほどキューバと親しくさせてもらっています。そのキューバへ行ってキューバのダイアナと言われる20歳のタレントに曲をつくって頂きました。今日はお別れにその中の一曲と、古賀政男の「無法松の一生」をCDに入れたものを聞いて頂きたいと思っています。